

会報

大学生協友の会

2025年11月1日
第48号
大学生協友の会発行〒166-8352 東京都杉並区和田 3-30-22 全国大学生協連役員室 TEL: 03-5307-1111
E-mail: univcoop@univcoop.or.jp ホームページ: <https://univcoop.jp/>

2025年12月大学生協友の会 懇親会へのお誘い

幹事長 和田 寿明

会員の皆様へ



拝啓、秋冷の候、皆様にはますますご健勝のことと慶び申し上げます。2025年も残すところ数か月となり、時の流れの速さを感じる今日この頃です。

さて、今年の夏は記録的な猛暑に見舞われ、まさに災害級の酷暑でした。外出を控えざるを得ない日も多く、熱

中症による死者数は昨年を大きく上回る見込みです。2024年には2000人を超える方が亡くなり、これは大地震に匹敵する規模の災害と言えるでしょう。世界各地でも異常気象が続き、地球温暖化の深刻さを改めて実感しています。

総務省の発表によれば、2025年の日本の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は約3割、4000万人に達しました。働き続ける高齢者も930万人と過去最高を記録し、労働基準法の改定により、70歳まで働ける環境が徐々に整いつつあります。現役世代の社会保険料負担が増す中、政府は高齢者の就労を促進していますが、年金だけでは生活が困難な方も多く、無理をして働かざるを得ない現状に心を痛めています。

少子化も深刻さを増しており、出生数の減少が続

く中、未婚者や単身世帯、高齢の一人暮らしが増加し、孤独死の問題も顕在化しています。明るい話題といえば、大谷翔平選手の活躍や阪神タイガースの優勝（私は巨人ファンですが）くらいでしょうか。大学生協の事業環境も、こうした社会情勢の影響を受けて厳しさを増しています。少子化により地方私学の存続が危ぶまれ、大学生協の運営にも影響が及んでいます。今後は都市部にも波及する可能性があり、関係者の皆様から現状についてお話を伺いたいと思っております。

私事ではございますが、2025年1月に妻が60歳で他界いたしました。3年弱の闘病生活の末、がんの進行が早く、効果的な治療法も見つからず、あっという間の別れでした。一人になって改めて、妻の存在の大きさと家族の大切さを痛感しています。仕事に打ち込めたのも、妻の支えがあったからこそ。家族や地域との関係を顧みずに過ごしてきたことを、今は深く反省しています。どうか皆様も、身近な大切な人との時間を大切にしていきたいと願っております。「後悔先に立たず」です。

最後に、恒例となりました大学生協友の会親睦会を、今年も開催いたします。

●日時: 2025年12月6日(土) 14:00~16:00

●場所: 大学生協杉並会館5階

●会員の皆様の近況を共有し、旧交を温めるひとときとなれば幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

大学生協・東京地区のこの10年をふりかえって

— コロナ禍を越え、協同の再構築へ —

大学生協事業連合 東京地区担当常務理事 後藤 有里

◆この10年、大学生協にとって本当に大きな変化の時でした。

同じ大学生といえども皆が同じものを食べ、使う時代はとうに終わり、合併の前から事業連合の共通購買の力を束ねる役割も見直す必要に迫られていました。多くの職員が減りゆく供給の中でも「どうしたら学生に喜ばれるか」を模索してきましたが、次の一手の輪郭をつかみきれずにいました。この時期に大学生協特有の付加価値を再発見し、「学生支援業」へのシフトを遂げた地域と、従来の「小売業・食堂業」のマイナーチェンジに留まった地域との差が、次第に開いていきます。東京は後者でした。

◆2018年の事業連合合併、2020年のコロナ禍―・基盤をリセットする出来事

組織統合の混乱克服の最中に大学閉鎖が始まり、食堂や店舗が閉まり、学生も職員もキャンパスに行けない日々が続きました。誰もいない大学で途方に暮れながらも、オンライン説明会を立ち上げたり、通販にシフトしたり、学生寮に食料を届けたりと努力しました。現場の工夫と粘りが、東京地区全体を支えてくれました。仲間の退職・移籍に耐えながら、組織の存続に力を注ぎました。あの時期の静かな奮闘は、今も胸に残っています。そして2022年度末、大学生協はコープ共済連への共済事業譲渡をおこない、財務的危機を乗り越えました。

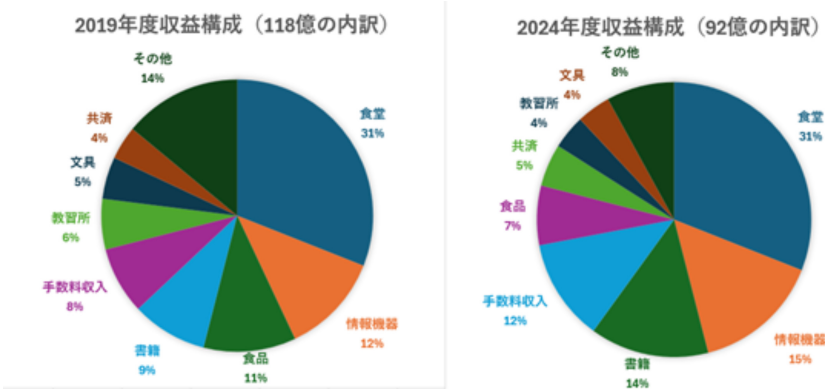
【2018～2024年度 東京地区各生協の合算決算推移】

2020～2021年度はコロナ禍の直撃を受けましたが、完全閉店も多く、ある意味振り切ったコスト削減ができる状態でした。2022年度は共済事業の譲渡で当期剰余にプラスのスパイクが入っています。2023年度以降は大学が通常に戻り、生協も通常営業をせねばならない一方で、オンライン授業が増え「毎日通わない」「講義以外は滞在しない」大学生活が標準となり、客数が以前に戻ることはありませんでした。

(万円)	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
供給高	5,776,269	5,503,107	3,261,565	3,799,154	3,812,252	4,025,266	4,203,559
事業総剰余	1,225,838	1,180,391	605,770	758,165	858,625	931,723	950,569
事業経費	1,217,496	1,224,702	922,705	845,409	971,700	1,034,156	1,056,725
事業剰余	8,342	-44,311	-316,935	-87,244	-113,075	-102,433	-106,156
経常剰余	11,823	-34,779	-197,992	-27,457	-89,533	-87,560	-86,347
当期剰余	22,823	-19,782	-95,605	47,368	296,246	-56,047	-52,311

【税引き前、当期赤字の生協数】

2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
23	39	55	23	0	50	44



滞在時間が短くなり、セルフ商品収益が減少。滞人口減少で混雑が緩和され、「どうせ食べるなら食堂で」という行動習慣も明確に。住まい・講座・卒業レンタル袴等の手数料収入が収益の支えとして台頭します。

◆コロナ禍を経た危機の中で、「協同の原点」を思い出すきっかけが生まれました。

2023年度50生協が単年度赤字という危機的な状況から2024年度以降は「協同組合機能の健全化」「収益強化」「生産性向上」を柱に、私たちは変わろうとしています。事業連合合併後、全国の地区間で頻繁に事業経営における比較分析の機会も増え、「なぜ東京は組合員1人あたりの利用高が低いのか」「なぜ共済加入率が低いのか」など、市場の大きさゆえに隠れていた課題が浮かびあがりました。それは、「協同を実感できる日常」が少ないことでした。入学前の新入生向け説明会で、生協職員と学生が行うプレゼンを分析すると、東京地区の生協は物やサービスの説明が圧倒的に多いのです。一方、成績の良い他地区の生協では、生協・共済の理念語りや学生の体験談が圧倒的に多いのです。ありありと、いきいきと、楽し気に、学生・職員が生協の魅力と、生協のある生活を語る・・・そんなプレゼンができるのは、紛れもなく日常的に組合員に信頼される生協がそこにあるからです。

◆私たちのこれまでとこれからを、「学生支援業」という枠組みでとらえなおす

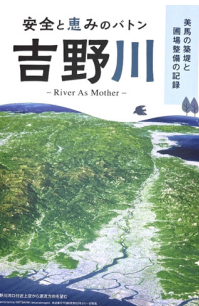
この春、ミール定期券は7割の食堂に普及しました。学食が1日定額前払制ですので、登録学生は「食べなきゃ損」と毎日食堂で食べる習慣ができています。生協が提供する学び企画の機会を活かし、PC技能や外国語を身に付け、海外で異文化体験に挑戦する学生もいます。住まい提供や共済、食堂事業で安心・健康を支え、学び支援で学生の成長を後押しする・・・いま、単純な物の供給から、大学生協しか提供しえない価値を届けることへ重心を移しています。結局のところ、私たちが辿り着いたのは、ずっと昔から変わらない答えでした。「組合員とともに生き、信頼を積み重ねていく」—その姿勢こそ、生協の原点です。長い低迷の中、短期的な成果を追うあまり、組合員との関係を築く時間を失いかけたこともありました。今はその時間を取り戻し、目の前の学生と丁寧に向き合うところからやり直しています。協同とは、時間をかけて築く信頼の営み。そしてその営みがある限り、大学生協は立ち上がることができると思っています。



「会報No. 46にて連合会中森専務より「コロナ禍からの回復状況は80%程度」との報告をいただきました。

今回は、より詳しい状況について知りたいとのことから、友の会の多くの会員がかかわった東京地区における、コロナ禍前から昨年までの状況と今後の指針について、大学学生協事業連合後藤常務（近影はご本人）よりレポートをいただきました。（事務局より）

本づくりは こじゃんとええことが



<題字自筆>

——覧塔さん、最近本の編集をしたそうですね？

覧塔（以下「R」） はい、自費出版の編集をさせてもらいました。

——どういういきさつだったのですか？

R 小林正美さんのお兄さん・信男さんが自叙伝的なものを出したいからと頼まれたのです。

——どのような本になったのでしょうか？

R 小林信男さんは三十代半ばでアルコール依存症になり全てを失いそうになりました。これから一生酒は飲まんと誓って人生やり直そうと覚悟を決めたところ、もう一度チャンスを与えると会社が命じたのがフィリピン勤務です。蜘蛛の糸にすがる思いでマニラへ。44歳、ゼロからの出直しです。

現地でおもに橋・道路の建設・整備をおこなう政府開発援助プロジェクトで施工監理プロジェクト・マネージャーを任されるまでになりました。その後、パキスタン、ケニアでもシニア技術者として34年間従事してきました。その自分史ですね。

——それはとても興味深い人生ですね。編集というと具体的にはどのようなことを？

R 章立てや取り上げるトピックスは筆者と相談して決めていきました。0次原稿ができてからは削ったりふくらませたりです。書きにくいであろうアルコール依存症のことも増やしてもらいました。表記のゆらぎの整理、たとえば原稿に“こたつ”と“炬燵”があった場合、どう揃えるかということですね。260ページ、約12万字ありますから大変です。入稿後はひたすら校正です。午前中の小学校の仕事が終わったら夜遅くまで机にかじりついていました。

——それはお疲れさまでした。でも「できる」と思ったから引き受けたのではないですか？

R そんなことはありません。読書感想文が大の苦手で気の利いた表現もできなくて、本当にお役に立てるのか不安いっぱいでした。

それでも1点目の『安全と恵みのバトン 吉野川』では「堤防建設・圃場整備の石碑ではなく、古文書として残る記録を作りたい」という志に応えたい気持

ちでした。これからの農業というまさに今のテーマもありました。

2点目の『冬桜』は「孫に読んでもらいたい」という筆者の思いが励みでした。

幸い、デザイン・印刷をお願いできる先輩がいたのは心強かったです。

——編集した感想は？

R 終わったら二度とするものかと思うくらいヘトヘトでした。同時にたまらなく好奇心を刺激されました。なんていうのでしょうか、おもしろい仕事でした。仕事と言うのも変ですが。

——ところで本って出せるものなんですか？

R 自費出版に2点かかわった経験しかありませんが、自費出版なら形にできるのではないのでしょうか。

小林信男著



自分史『冬桜』

冬桜は埼玉県児玉郡神泉村（現・神川町）の城峯公園に冬に咲く桜として有名。筆者は断酒のため公園近くに逗留し冬桜に出会いました。

『冬桜』ご希望の方はこのQRコードからお申し込みください。
1000円＋送料でお届けします。



注：この原稿は覧塔がインタビュー形式を取って書いたものです。



近況：双子の女の子含め3人の孫と遊び癒されています

（覧塔久信 hisanobu.ranto@gmail.com）